

神の前では対等（卒業礼拝によせて）

2024・2・28 重枝 一郎

以前、「Sence of Mission」で書いた内容だが、もう一度話す。

中高時代キリスト教主義の学校で学んで、教師という仕事をしている人に会った。本校にもそういう先生は多くいる。

その人が私に中高時代のことを話してくれた。その人が一番印象として残っているのが、中学に入りたての頃の担任の先生の一言であった。ある日担任先生に呼ばれて行くと、あることについて「あなたはどうお思いになりますか？」と尋ねられたそうである。先生が生徒に敬語を使うことへの驚き、ましてや先生の姿勢は一貫して中学生の自分と対等な感じを受けたそうである。その人は、先生が自分を一人の人間として接してくれていたと振り返っている。

時は流れ、その人は教師になった。教師になったその人は、価値基準として、誰であろうと一人の人間としての存在は全く同じということ、今でも大切にしていると言う。

中高時代というのは言うまでもなく大変難しい時代である。それは特定の個人の問題ではなく、誰でも、いつの時代でも同じである。生徒が、他の誰にとって代わることができない確立した一人の個人となるための格闘の期間だからである。その中で、自分自身の人生の核になる部分を作り上げていく。本校の「大切なひとり」とはそういう意味である。その手助けをしていくのが本校教師の役割である。教師は専門の学問を教えるが、それ以外に社会との橋渡しをしたり、人生の先輩としての経験などをいろいろな場面を通して教えたり、見せていくことになる。

キリスト教主義の本校では、その役割をする場合、生徒という対象であっても、神の前であっては対等な一人の人間として接していくことが求められている。生徒一人一人の「個」を重んじるのは、単に「個性」の尊重ではなく、神によって与えられた人間として生徒を見ることにつながる。教師と生徒という関係であったとしても、神という存在を通して生徒を見て、接して、導いていく。

さて、その先生は、今現在教師生活を元気に送っている。そして私にこうも話した。「私は日々思っています。自分の目の前にいる生徒は、神が私を人間的に、また、教師として成長していくために必要な存在として出会わせてくれた大切な存在だと。教師と生徒は、年齢も経験も知識も差があるかもしれませんが、神という存在の前であっては対等であり、相手を神という存在を通して接し導いていくことが大切になります。これが中高キリスト教主義の学校で育った私の根底にあるものです」と。最後に、「学んだことしか伝えられません」とにこやかに話していた。

みなさんご承知だと思うが、私はクリスチャンではない。しかも本校の138年間のうち、まだ3年しか時を過ごしていない。しかし、生徒に「自分は何者？」という自己存在意義を考えさせる「大切なひとり」の教育は、これまでの教員人生で実践していたつもりである。クリスチャンでなくても「隣人を愛する」聖書の教えは、生徒の人格形成に大切だと思っている。私のようなものからすると敷居が高いと感じてしまうキリスト教も、学校教育を通してだからこそ抵抗なく受け入れられる。そういう事実を感じながら日々過ごしている。本校に関わる多くの人たちもきっとそうだろうと思う。

毎朝の礼拝での「沈黙・静寂・讃美歌と聖句」、それは安息の時である。

時満ちて、いよいよ旅立ちの時です。高3の先生方おめでとうございます。